

II

勾配・発散・回転

スカラー場やベクトル場について、それらの場の各位置がもつ特徴を考えます。各位置の特徴は微分演算によって求めることが可能です。スカラー場は、各位置にスカラーが存在するだけのものですが、各位置のスカラー間の関係性からベクトルが導かれ(勾配)、結果としてスカラー場の各位置の特徴を表すベクトル場が得られます。また、ベクトル場からは、その特徴を表すスカラー場(発散)や、また別の特徴を表すベクトル場(回転)が得られます。

第II部では、これらの場がもつ特徴をどのように演算するか、どのような意味があるのかを学びます。

5 スカラー場の勾配

要点

1. スカラー場 φ の勾配はベクトルとなり、これを $\text{grad } \varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial \varphi}{\partial y} \mathbf{j} + \frac{\partial \varphi}{\partial z} \mathbf{k}$ または $\nabla \varphi$ と表す.
2. 等位曲線や等位面は、空間上で同じスカラー値をもつ.
3. 勾配ベクトルの向きは、法線ベクトルの向きに等しい.
4. スカラー場の勾配の演算に関して成り立ついくつかの基本法則が存在する.

準備

1. 偏微分について復習する.
2. ベクトルの内積を復習する.
3. ベクトルの正規化(単位ベクトル化)を復習する.

5.1 スカラー場の勾配

位置に応じたスカラーが存在する空間を、スカラー場という。たとえば、図 5.1 の地形図は、平面空間の位置ごとに高さ(スカラー値)を考えたスカラー場である。ところで、このような地形図では、隣り合った位置の高さが違うと傾

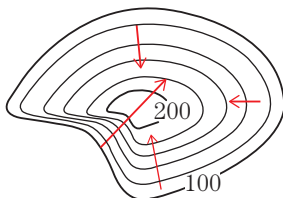


図 5.1 地形図と各位置における勾配

斜(勾配)がある。また、温度のスカラー場も、位置ごとに温度の変化の大きさ(勾配や変化率)が考えられる。これらの勾配や変化率は、方向と大きさをもつのでベクトルである。つまり、スカラー場の勾配は、ベクトル場となる。

位置 (x, y, z) でスカラー値をもつスカラー場 $\varphi(x, y, z)$ を考える。スカラー場 $\varphi(x, y, z)$ におけるスカラーの空間内の変化率を、**勾配**あるいは **gradient** (グラディエント) という。この勾配は、微小な位置の変化に対するスカラーの変化である微分として表される。方向に応じた微分である偏微分をベクトルの成分と考えて、

$$\text{grad } \varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial \varphi}{\partial y} \mathbf{j} + \frac{\partial \varphi}{\partial z} \mathbf{k}$$

と表す。このように場の各位置の特徴は、微分演算で求められる。

例題

勾配の演算子 **grad** は、ベクトルの微分演算子 ∇ (ナブラ)

$$\nabla = \mathbf{i} \frac{\partial}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial}{\partial z}$$

を考えると、 $\text{grad } \varphi = \nabla \varphi$ と表せる。どちらも同じ意味だが、 $\nabla \varphi$ の表記を用いることが多い。勾配 $\nabla \varphi$ は、スカラー場 $\varphi(x, y, z)$ から求められるベクトルであり、**勾配ベクトル**ともいう。

例題 5.1 $\varphi(x, y) = x^2 + 2y^2$ の勾配ベクトルを、点 $(0, 0)$ 、点 $(1, 0)$ 、点 $(2, 2)$ において求めよ。

答 $\nabla \varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial \varphi}{\partial y} \mathbf{j} = 2x\mathbf{i} + 4y\mathbf{j}$ であるから、点 $(0, 0)$ 、点 $(1, 0)$ 、点 $(2, 2)$ の勾配ベクトルを求めると、それぞれ $\mathbf{0}$ 、 $2\mathbf{i}$ 、 $4\mathbf{i} + 8\mathbf{j}$ 。 ■

例題

平面のスカラー場 $\varphi(x, y)$ において、定数 c に関する方程式

$$\varphi(x, y) = c$$

は、同じスカラー値 c をもつ位置だけを抜き出すことを意味し、一般にその抜き出された部分は曲線になるので、これを**等位曲線**という。図 5.1 のような地形図であれば、等高線が等位曲線である。同様に、スカラー場 $\varphi(x, y, z)$ において、 $\varphi(x, y, z) = c$ は一般に曲面を表し、これを**等位面(等位曲面)**という。

例題 5.2 $\varphi(x, y) = x^2 + 2y^2$ における、点 $(2, 1)$ を含む等位曲線を求めよ。

答 $\varphi(2, 1) = 2^2 + 2 \cdot 1^2 = 6$ であるから、等位曲線は $x^2 + 2y^2 = 6$ 。 ■

5.2 勾配ベクトルと法線ベクトル

等位面と勾配ベクトルの関係を考える。スカラー場 $\varphi(x, y, z)$ の点 A (x, y, z) を通る等位面 $\varphi = c$ を考え、また、等位面上の点 A に近接した点 B $(x + \delta x, y + \delta y, z + \delta z)$ を考えて、

$$\vec{AB} = \delta x \mathbf{i} + \delta y \mathbf{j} + \delta z \mathbf{k} = \delta \mathbf{r}$$

とする。曲線上の 2 点を結ぶ直線は、 $\delta x, \delta y, \delta z \rightarrow 0$ のとき、その点における接線を意味するので、ベクトル $\delta \mathbf{r}$ は、等位面 $\varphi = c$ の点 A における接線のベクトルになる。

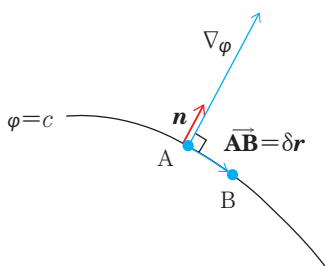


図 5.2 等位曲線と接線および勾配ベクトルの関係

接線のベクトル $\delta \mathbf{r}$ と勾配ベクトル $\nabla \varphi$ の関係を内積により求めてみる。内積を、

$$(\nabla \varphi) \cdot \delta \mathbf{r} = \delta x \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \delta y \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \delta z \frac{\partial \varphi}{\partial z} = \delta \varphi$$

と表すと、右辺の $\delta \varphi$ は、 φ の偏微分、つまり φ の傾きに点 A から近接点 B までの位置の変化量 $\delta \mathbf{r}$ を掛けたものであり、これは点 A から近接点 B までの φ の値の変化量を意味している。しかしながら、点 A と点 B はスカラー場 φ の等位面上の点である。すなわち φ の値は同じなので、 $\delta \varphi = 0$ である。したがって、

$$(\nabla \varphi) \cdot \delta \mathbf{r} = 0$$

が成り立っている。内積が 0 なので、勾配ベクトル $\nabla \varphi$ と接線のベクトル $\delta \mathbf{r}$ は垂直の関係にある。

ところで、点 A に対して点 B を 1 つだけ考えると、接線 $\vec{AB} = \delta \mathbf{r}$ に垂直なベクトルは \vec{AB} を回転軸として無数に存在してしまう。しかし、点 B は点 A 近傍の等位面上に任意にとれ、勾配ベクトル $\nabla \varphi$ はいずれの \vec{AB} に対しても垂

直なベクトルであることを考えると、勾配ベクトル $\nabla\varphi$ は、点 A における等位面に垂直なただ 1 つのベクトルであることがわかる。

④ 注意

なお、等位面あるいは等位線に垂直なベクトルを**法線ベクトル**という。つまり、勾配ベクトルは法線ベクトルに方向が一致している。したがって、大きさが 1 となる**単位法線ベクトル**を \mathbf{n} とすると、 \mathbf{n} は次のように表される。

$$\mathbf{n} = \frac{\nabla\varphi}{|\nabla\varphi|}$$

法線ベクトルの方向としては等位面に垂直な、正反対の 2 つの方向が考えられる。方向を確認するため、**方向微分係数**を考える。方向微分係数とは、スカラー場 φ 上の点 A (x, y, z) を始点とする単位ベクトル $\mathbf{u} = u_x\mathbf{i} + u_y\mathbf{j} + u_z\mathbf{k}$ を考え、変数 t により位置を変える単位ベクトル \mathbf{u} 上の点 B $(x + tu_x, y + tu_y, z + tu_z)$ のスカラー値 φ の変化率を、 t を 0 に近づけて求めたものである。つまり、 \mathbf{u} 方向の方向微分係数 $\frac{d\varphi}{du}$ は次のように表される。

$$\begin{aligned} \frac{d\varphi}{du} &= \lim_{t \rightarrow 0} \frac{\varphi(x + tu_x, y + tu_y, z + tu_z) - \varphi(x, y, z)}{t} \\ &= \left. \frac{d}{dt} \varphi(x + tu_x, y + tu_y, z + tu_z) \right|_{t=0} \end{aligned}$$

この方向微分係数 $\frac{d\varphi}{du}$ が正であれば、 \mathbf{u} 方向に φ の値が増加することを意味する。

合成関数の微分法を用いると、上記最右辺は

$$\frac{\partial\varphi}{\partial x} \cdot \frac{dx}{dt} + \frac{\partial\varphi}{\partial y} \cdot \frac{dy}{dt} + \frac{\partial\varphi}{\partial z} \cdot \frac{dz}{dt}$$

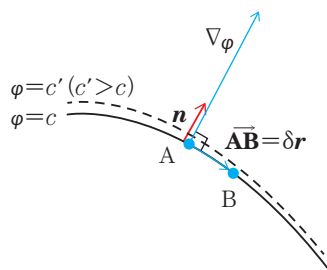


図 5.3 勾配ベクトルおよび法線ベクトルの方向

となる. ここで, たとえば x 方向については, $dx = u_x dt$ であるから, 結局

$$\frac{d\varphi}{du} = u_x \frac{\partial \varphi}{\partial x} + u_y \frac{\partial \varphi}{\partial y} + u_z \frac{\partial \varphi}{\partial z} = \mathbf{u} \cdot (\nabla \varphi)$$

と表せる.

この方向微分係数を用いて, 単位ベクトル \mathbf{u} として単位法線ベクトル \mathbf{n} をとれば, すでに求めた $\mathbf{n} = \nabla \varphi / |\nabla \varphi|$ の関係を用いて

$$\mathbf{n} \cdot (\nabla \varphi) = \mathbf{n} \cdot |\nabla \varphi| \mathbf{n} = |\nabla \varphi| > 0$$

と方向微分係数が正になる. この結果は, 勾配ベクトル $\nabla \varphi$ および単位法線ベクトル \mathbf{n} の方向は, φ の値が増加する方向であることを示している.

例題 5.3 $\varphi(x, y) = x^2 + 2y^2$ の, 点 $(1, 1)$ における単位法線ベクトルを求めよ.

答 $\nabla \varphi = \frac{\partial \varphi}{\partial x} \mathbf{i} + \frac{\partial \varphi}{\partial y} \mathbf{j} = 2x\mathbf{i} + 4y\mathbf{j}$ なので, 点 $(1, 1)$ の勾配ベクトルは

$2\mathbf{i} + 4\mathbf{j}$. したがって単位法線ベクトルは, $\mathbf{n} = \frac{\nabla \varphi}{|\nabla \varphi|} = \frac{2\mathbf{i} + 4\mathbf{j}}{\sqrt{2^2 + 4^2}}$

$$= \frac{\sqrt{5}}{5} \mathbf{i} + \frac{2\sqrt{5}}{5} \mathbf{j}. \quad \blacksquare$$

5.3 スカラー場の勾配の基本法則

要点 4

スカラー場の勾配に関する法則として, スカラー場 φ , ψ について, 次の関係が成立する.

(a) $\nabla(k\varphi + l\psi) = k\nabla\varphi + l\nabla\psi$, (k, l はスカラー)

(b) $\nabla(\varphi\psi) = (\nabla\varphi)\psi + \varphi(\nabla\psi)$

(c) $\nabla\left(\frac{\varphi}{\psi}\right) = \frac{(\nabla\varphi)\psi - \varphi(\nabla\psi)}{\psi^2}$

(d) $\nabla(f(\varphi)) = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \nabla\varphi$, (f はスカラー関数)

これらの関係のいくつかについて, 以下で証明を行う.

(a) $\nabla(k\varphi + l\psi) = k\nabla\varphi + l\nabla\psi$ を証明する.

$$\nabla(k\varphi + l\psi) = \mathbf{i} \frac{\partial(k\varphi + l\psi)}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial(k\varphi + l\psi)}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial(k\varphi + l\psi)}{\partial z}$$

$$\begin{aligned}
 &= \mathbf{i} \frac{\partial (k\varphi)}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial (k\varphi)}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial (k\varphi)}{\partial z} + \mathbf{i} \frac{\partial (l\psi)}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial (l\psi)}{\partial y} \\
 &\quad + \mathbf{k} \frac{\partial (l\psi)}{\partial z} \\
 &= k \left(\mathbf{i} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial \varphi}{\partial z} \right) \\
 &\quad + l \left(\mathbf{i} \frac{\partial \psi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial \psi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial \psi}{\partial z} \right) = k\nabla\varphi + l\nabla\psi
 \end{aligned}$$

証明終わり

なお、単位ベクトル \mathbf{k} とスカラー k を混同しないこと。

(b) $\nabla(\varphi\psi) = (\nabla\varphi)\psi + \varphi(\nabla\psi)$ を証明する。

$$\begin{aligned}
 \nabla(\varphi\psi) &= \mathbf{i} \frac{\partial (\varphi\psi)}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial (\varphi\psi)}{\partial y} + \frac{\partial (\varphi\psi)}{\partial z} \mathbf{k} \\
 &= \mathbf{i} \left(\psi \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \varphi \frac{\partial \psi}{\partial x} \right) + \mathbf{j} \left(\psi \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \varphi \frac{\partial \psi}{\partial y} \right) \\
 &\quad + \mathbf{k} \left(\psi \frac{\partial \varphi}{\partial z} + \varphi \frac{\partial \psi}{\partial z} \right) \\
 &= \psi \left(\mathbf{i} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial \varphi}{\partial z} \right) + \varphi \left(\mathbf{i} \frac{\partial \psi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial \psi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial \psi}{\partial z} \right) \\
 &= (\nabla\varphi)\psi + \varphi(\nabla\psi)
 \end{aligned}$$

証明終わり

(d) $\nabla(f(\varphi)) = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \nabla\varphi$ を証明する。

$$\frac{df(\varphi)}{\partial x} = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial x}, \quad \frac{df(\varphi)}{\partial y} = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial y}, \quad \frac{df(\varphi)}{\partial z} = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial z}$$

より、

$$\begin{aligned}
 \nabla(f(\varphi)) &= \mathbf{i} \frac{df(\varphi)}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{df(\varphi)}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{df(\varphi)}{\partial z} \\
 &= \mathbf{i} \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \frac{\partial \varphi}{\partial z}
 \end{aligned}$$

$$= \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \left(\mathbf{i} \frac{\partial \varphi}{\partial x} + \mathbf{j} \frac{\partial \varphi}{\partial y} + \mathbf{k} \frac{\partial \varphi}{\partial z} \right) = \frac{df(\varphi)}{d\varphi} \nabla \varphi$$

証明終わり

なお、ベクトルの勾配に関して、 $\nabla \varphi = \mathbf{0}$ が常に成立する場合、 φ は定数である。これは、スカラー値 φ が位置により変化しないことを意味する。また、ある点において $\nabla \varphi = \mathbf{0}$ の場合、零ベクトルは方向をもたないから、その点における法線がない、あるいは定義されないことを意味する。

例題 5.4 $\varphi(x, y) = 2x + y$, $\psi(x, y) = x - 2y$ のとき、 $\nabla \left(\frac{\varphi}{\psi} \right)$ を求めよ。

答 $\nabla \left(\frac{\varphi}{\psi} \right) = \frac{(\nabla \varphi)\psi - \varphi(\nabla \psi)}{\psi^2}$ の関係を用いる。

$$\nabla \left(\frac{\varphi}{\psi} \right) = \frac{(2\mathbf{i} + \mathbf{j})(x - 2y) - (2x + y)(\mathbf{i} - 2\mathbf{j})}{(x - 2y)^2} = \frac{5}{(x - 2y)^2} (-y\mathbf{i} + x\mathbf{j}).$$

展開

問題 5.1 次の関数の $\nabla \varphi$ を求めよ。

(1) $\varphi(x, y, z) = x^2z + 2y^3z^2$

(2) $\varphi(x, y) = \sin x \cos^2 y$

問題 5.2 $\varphi(x, y) = \exp(x^2 + y^2)$ の勾配を、点 $(0, 0)$ 、点 $(1, 0)$ 、点

$\left(\frac{\sqrt{2}}{2}, \frac{\sqrt{2}}{2} \right)$ において求めよ。

問題 5.3 $\varphi(x, y, z) = x^2 - 2y^2 + z$ における、点 $(2, 2, 4)$ を含む等位面を求めよ。

問題 5.4 $\mathbf{r} = x\mathbf{i} + y\mathbf{j} + z\mathbf{k}$, $r = |\mathbf{r}|$ のとき、以下を \mathbf{r} を用いて表せ。

(1) ∇r

(2) $\nabla \log r$

確認事項 II

5章 スカラー場の勾配

- スカラー場の勾配を求められる。
- 等位曲線，等位面を理解している。
- 勾配ベクトルと法線ベクトルの関係を理解している。
- スカラー場の勾配の基本法則を理解している。

6章 ベクトル場の発散

- ベクトル場の発散を求められる。
- ベクトル場の発散の基本法則を理解している。
- ラプラス演算子の意味を理解している。

7章 ベクトル場の回転

- ベクトル場の回転を求められる。
- ベクトル場の回転の基本法則を理解している。

8章 ベクトル公式

- スカラー三重積，ベクトル三重積を理解している。
- 演算子を組み合わせた演算を理解している。
- スカラー場とベクトル場の組み合わせの演算を理解している。
- ベクトル場とベクトル場の組み合わせの演算を理解している。
- ポテンシャルを理解している。